

◆朝起きてさつとカーテンを引いて、戸を開ける。目の前の庭から空を見上げて、その日の気分がどうであれ、あわただしく一日がはじまる。それが、手軽に鉢植えの花を置いていた庭の手入れをしないままになっていることを気にしながら時間が過ぎてしまった。多年草の「玉すだれ」がほつと咲き出したが、他に色どりがないと寂しい。目の前に花があるだけでも和やかになる。冬枯れにならないよう、鉢植にする花を買って来て賑やかな庭にしよう。

市川茂子

◆浅草の演芸ホール内四階の東洋館というところで、落語以外の演芸（多く漫才）をみることになった。結社内小歌会で恒例の秋の吟行会である。二十組、中入りを挟んで四時間余という時間、昔の映画館のような場所で、椅子がやや狭く、硬く、尻が痛くなった。笑いでなければ耐えられなかった。寄席は、（はっきりした記憶のなかでは）初めて。ビートたけしがエレベーターボーイをしていたというエレベーターも浅草になじんでいないので、ただ聞くばかり。そもそもじぶんは東京で遊んでいないな、と思った。予備校に通うために、上京して板橋区内の下宿に住んでいたことがある。以降も、都内にしるまちはわずか。昼の吾妻橋から、夕の雷門からスカイツリーが怪獣映画の

なかでのようにビルの間にアンバランスに大きくみえた。

小野澤繁雄

◆秋も深まりナメコのシーズンとなったが、気候に左右されるこのナメコ。台風のもたらした雨で最初は少し出たようだが、その後はさっぱりだと言う。山のもものは天候次第で良くも悪くもなる。天候異変が続く、夏の暑い時期にクマやイノシシが里に現れて農作物を荒していったそうだが、聞くところによると山はブナグルミが豊作だそうである。自然界と人間界のスマートな棲み分けが何ともほしいところだが……。

神村ふじを

◆父の五十回忌法要の十月七日は真夏日でした。十月は気温の変動があり、自らを温度調節失調症と称して、同世代の友人たちからの賛同も得たりしている。冬にも暖房による熱中症があるとか、この夏の熱中症を拗らせた私には冬の低体温症との双方要注意になる。

河村郁子

◆「偶然」と「運命」は同義語ではない。ただしどっちも、外からやってくる。今回の原稿でも私は会話の流れの中で「大連」と「アカシア」を書き、布宮さんに送った。そのあと朝日新聞の「語る 人生の贈りもの」で渡辺京二氏が、ふるさと、ニセアカシアの街・大連を語って居られるのでびつくり。ひと足さきで良かった。去年も記憶違いかもしれないが、石牟礼道子さんの『春の城』

の大冊がすばらしいと書いて間もなく、彼女はなくなられた。きわめて個人的なものだが、偶然にも不思議なところがある。

河内愛子

◆あの夏の猛暑が不思議に思える程、爽やかな日々がこちらでは続いております。災害列島と云える程、台風は何度も見舞われ、その後始末に明けくれていらっしゃる方もおありと存じます。整理の苦手な私故、どんなに大変かとお察し申し上げます。お体にお気をつけの上、おすごしくださいますようお願い致しております。

谷垣満壽子

◆九月二十八日晴天の日、(山形県)白鷹町黒鴨から頭とうどの殿山の山腹を通り朝日鉱泉ナチュラリストの家まで行ってきた。このルートは、江戸時代後期の小嶋俊親としちか日記に記載がある。鉱泉宿は三軒もあり、湯治客で賑わったという。また、『日本百名山』で有名な深田久弥が大正十五年にここを通り、鶴岡側へ朝日連峰を縦走している。私の両親も青年団の頃に大朝日登山に辿ったと話す。ところが昭和三十年代に木川ダム建設に伴う林道が造られ、そこを通っての登山が一般的になった。黒鴨のルートはすたれたが、今から十年ほど前から白鷹山岳会が刈り払いに励み、復元させた。一度は通ってみたいという私たちの願いが叶えられた。かつては炭焼きがなされたらうがな樵の美しい二次林が広がっていた。

新野祐子

◆何十年来お世話になってきた歯科医さんが近日中に閉院されるという。高齢で手先が震えるようになり、事故を起こしては一大事だからとのこと。主治医をお願いしている内科の先生も、「自分もそろそろ……」と言われる。自分のことばかり考えて、先生方の年齢や事情に思いを致さなかったことに気がつき、大いにあわてている昨今である。

松井淑子

◆九月後半から十月にかけて、家の外廻りの工事があった。しかし天候に恵まれず、仕上りは予定よりずい分遅れた。そのあと小さな庭だが植木屋さんにもお願いしてあるので、それが終わるとホッとする。工事中、一日中家にいることはないのだが、用事があつたり連絡事項があつたりするので、空留守にはしないようにしていた。少しいが私の行動に制限がかかっていた。しかしそれも終り、ホッとしているところである。

丸山弘子

◆息子・ハルが学校の図書館から『虚数の情緒』という分厚い本を借りてきた。副題に「中学生からの全方位独学法」とある。難しい数学の話かと思いつながら頁をめくると——さあ諸君、勉強を始めよう勉強を。数学に限らず、——という巻頭言から始まり、学習の心得が熱い言葉で延々と綴られている。数学に限らずの言葉通り、数学の話に入る前の「0章」では個性とは何か、生き甲斐とは何かなど、人生で迷い道にいるときの道しるべとなるような思考が次々と語られており、その

一句一句の素晴らしさに感動した。著者は『オイラーの贈物』を記した京都大学工学博士である吉田武氏。日本国の頭脳を立て直したいと願う、著者渾身の一冊と感じた。

山内裕子

